

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

2023年6月26日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会長 藤 洋作 様

所属部局・研究科 文学研究科

職名・学年 博士後期課程3年

氏 名 天野 佑紀

助成の種類	令和5年度・国際研究集会発表助成			
研究集会名	ヨーロッパ・アフリカ研究会議2023 European Conference on African Studies 2023			
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()			
発表題目	19世紀の中部サハラにおけるヒトの移動性と社会的動態——植民地状況下におけるスワフアのサハラ内交易 Human Mobility and Social Dynamics in the Mid-Nineteenth Century Central Sahara: The <i>Suwāfa</i> 's Intra-Saharan Trade in Colonial Situation			
開催場所	ドイツ・ノルトライン ウェストファーレン州・ケルン・ケルン大学			
渡航期間	2023年5月30日 ～ 2023年6月5日			
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版1枚程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()			
会計報告	交付を受けた助成金額	350,000 円		
	使用した助成金額	350,000 円		
	返納すべき助成金額	0 円		
	助成金の使途内訳 (差し支えなければ要した 経費総額をご記入ください)	費 目	金 額 (円)	
		航空運賃	238,320	
		宿泊費	78,635	
		滞在費	30,000	
学会参加費		23,702		
その他(ドイツ国内交通費)	8,400			
以上に助成金を充当				
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 昨今の円安と欧州における慢性的な物価高騰により、海外渡航に対する障壁はこれまでになく高くなっている。貴財団からの助成のおかげで、学会参加にかかる金銭的負担を軽減することができた。感謝申し上げます。			

成果の概要／天野佑紀

1. ヨーロッパ・アフリカ研究会議とは

ヨーロッパ・アフリカ研究会議（European Conference on African Studies）とは、ヨーロッパに拠点を置く研究者を中心に、隔年で招集される国際学会である。同会議は、アフリカにかんするテーマであれば、人社系から自然科学系まであらゆる学問分野を包摂しており、日本アフリカ学会や米国の African Studies Association の年次大会と同系統の組織だといえる。そのため、一つのパネルに異なる学問分野の研究者が混在するという状況が珍しくなく、専門的な議論を突き詰めるというよりは、むしろ隣接分野の研究者との対話を通じて見聞を広めるといった「学際的」な交流を志向する学会だったように思われる。後述するように、これは報告者の参加パネルにも顕著にみられた点である。

2. 会議への参加を通じて

報告者は、大会3日目に開かれたパネル「New approaches to transport in Africa」に参加し、「Human Mobility and Social Dynamics in the Mid-Nineteenth Century Central Sahara: The *Suwāfa*'s Intra-Saharan Trade in Colonial Situation」という題目で報告した。この報告では、サハラ中央部（現アルジェリア東部）のスーフ地方周辺域に分布した集団、スワーファによるサハラ「内」交易の歴史を描くことを通じて、従来の人社系研究で自明視されてきた北アフリカとサブサハラ・アフリカという二分法的なアフリカ観を脱構築し、サハラを中心とした新たな空間枠組み＝歴史世界の構築に寄与することを目指した。具体的には、植民地行政文書、旅行記、商業書簡などの史料をもとに、19世紀中葉にサハラに進出してきたフランス植民地当局の影響力を前にして、スワーファが交易路や交易品をいかに変容させたかを分析したうえで、当該事例を19世紀の中部サハラの社会的動態というより広い文脈に位置づけることを試みた。

質疑応答では、パネルの主催者で歴史家の Baz Lecocq 氏からスワーファの「主体性」を強調するがあまり、それを規定した植民地支配の影響がやや分かりづらいとの指摘を頂いたことに加え、そのほか2名の研究者から、人類学・地理学的な観点からのコメントや質問を頂戴した。また、懇親会、昼食会、そしてコーヒープレイクといった場で同じパネルの参加者たちと交わした無数の議論を通じて、報告者のこれまでの分析からは抜け落ちてきた要素を認識することができた。

今回の報告で扱ったのは、英・仏語のいずれかで歴史系の国際ジャーナルに投稿することを目指して準備を進めている内容であった。議論を交わした研究者からの反応が全体として悪くなく、今回の報告が昨今のアフリカ史界隈で注目されているトピック群に位置づけられることを確認できたため、目標達成に向けて多少の自信がついた。もちろん、査読を通過させるためには議論をこれまで以上に精緻化していく必要はあろうが、それに向けた今後のモチベーションを得られたことが最大の収穫だったと言えるかもしれない。